

金郷春夕紫

へ13
2951



大正
2951

春郭多裙屐紅塵凝欲浮
香華大蘭若歌舞小揚州
花遶寺邊寺柳連樓外樓
此鄉宜醉處佳酒碧如油

象山春日雜咏 猿赤山人

水谷文庫

昭和十年
二月二十三日
購

自序

玉藻より 従時の猿乃人もひさかた

堀山文庫

大正

ひさかた いかげ子 丑 ぬい ころも ころも ころも
いしく 廣申 さらけ 友 ころも ころも ころも
たのぞる 身 藝 亦 猿 の まるめ 氣で 彼

大江戸に法名家より〜とあるは智
恵いふは世にほろぬれ母に〜とある
ふんづきの毛さくた〜と思ひまらば糸
て〜とあるのこを標や笑ひまゝ
大糸成の事漢語の事ある

そのころは〜とあるは〜とあるは
友誼赤が怒りた〜とあるはありあり
本先〜とあるは〜とあるは
みのかんぬもあら〜とあるは所〜とあるは
江戸〜とあるは〜とあるは
是ものちなる子代〜とあるは〜とあるは
名も〜とあるは〜とあるは
箴言〜とあるは〜とあるは

いづし
法
四
まきの山



うけり友をむかへり
都をかへりて西の方へ
しるはめり子なり
みありてやゆとひはきか
はしゆきてゆめり
嘉永三年
友人狂遊記

紅塵影漲
版橋夜銀
燭花搖水
榭煉
猿赤



好
物
田

金輝春乃夕榮

第一回

狹貫

猿赤居士戲編

島原芳原もろい象山よ人を動かせ花もさくよ予が友狂迂
痴叟がゆこのまて花も解語四季の春むれも客を松尾街
立百の長布と名付いんぞんむうのくれりて今ハ屋敷も
ア、三千て更鱗みづく夢こそがふ小浪花ともいふべられ
朝中より焼きたる混堂へ入る少年芋淨福理ハ古

とて輝菜のやうな常磐津もあるまの天邊よこびきらり
中もまぜりし賤娼の風俗こそあつての月れまゝ魚首まら
さつもあるはまの眠りたゞる海棠の如くの美人よありね
どもアノ家猪くまの中は臭氣ぞうりい似たりんその次い
ばつちもちたれまゝ人相もそ足のごつてあつてあつて
立白もつれい引切これに蘭人はんせまゝスワレトバアトれや
りあるんその次の丹波のまより生捕まゝ鬼娘のやうな
麻面草鞋でふんが板橋の霜の如る白粉れ凹凸の中は

残りしをぬる袋あてまらつて梅吉さんアノ小松さんトあひ
搦習ハモウあやうヨフリヤやううてイヤゆぶアノ鬼の浪聲
のちげでまが客まが氣がらうり三丁も四丁も五六丁もあや
とほつちの蠟燭を打やあつて子ぶんやとやういふもの
杜宇よるまのハハイガヤううまゝくやイヤエゼイヤモ八千
ハ聲もたあつていむひがううてなやうきまゝとそつあべ
きれトあきて居る門口よりこゆ履の音クハラくやまゝの
人の魂をふくむたれあつてぬまゝの歌妓一個いキイタうらぶ

嶋藍舟慶よ黒孺子の襟あはらうあはひ髪はやも奇癖よ
玲瓏多美金石れ簪チヨイヤ横く少一年のやうなれ眉毛
も梨の花一枝雨を帯う淡粧りけい蟻の穴よりも千
づも崩ア一箇ハその妹かともくまご初をれ嘆きの
櫻の艶も梅の粹をく一味加へ氣入らぬ風をいるびらぬ柳に
いろ阿難尊者でもうと煩惱ちやうきて還俗する氣なる
ぞし況て凡夫のドウ達いらぬ氣んれ二ツも牛の角ゆ
膝間よ生風名を吹くもあられいせぞとこまる風情あり

第二回

爰に玉藻を急ぎぬとの通客あり玉の危底くう
みかやあげたる顔い光る源氏の君ももをさくかともぬも
男より天下第一との美人を掌中よの人といふ大願をぞ
おろくろその美人との三十二相悉く具足しける中も
膚のよきをもちて極上といふ説をゆ光明皇后の故より
るし日よ風名をよらう千人の女をたあしき今
此山奴が汝女をさるる身はよりけり芙蓉の葉あは咲く

かごとく一^つ點^いを^い瑕^いの^いむ^い子^いの^いむ^いき^いを^い秀^い色^い可^い餐^い肌^いな^いむ^いむ
流^いを^い涎^いの^い三^い千^い丈^いとも^い子^い白^い髪^いの^いま^いで^いし^い心^いの内^いを^い思^いひ^いつ
船^い火^い舟^い子^いより^いか^いり^い吸^い付^い煙^い草^いの^いう^いも^いあ^いり^いを^い連^い環^いの^い輪^い子^い
ち^い三^いツ^い吹^い出^いく^い唇^いを^い越^いへ^いの^い雅^いも^いん^いい^いま^いと^いあり^い原^いの^い中^い將^い
さん^いより^いい^い男^いト^いほ^いむ^いこ^いい^いま^いを^いぐ^いれ^い吉^い料^いも^いや^いは^いる^いが^いこ^い
魔^い女^いの^い如^いく^いを^いぶ^いく^いそ^いう^いま^いが^いぶ^いへ^いより^い可^い湯^いが^いあ^いら^いう^い
上^い氣^い志^いま^いし^いこ^いヨ^いも^いし^いが^いり^いる^いその^い内^い扇^い子^いま^いッ^いト^いか^い
か^いん^いる^いま^いし^いト^いら^いい^い象^いと^いも^い其^い道^いの^い如^いき^いる^いま^いし^い男^い

あ^いれ^いハ^いイ^いヤ^いあ^いる^いこ^いの^いや^いる^い金^い盛^いの^いお^いよ^い觸^いま^いす^いと^いい^いあ^い
ま^いし^いれ^いう^いこ^いい^いや^いま^いト^いま^いを^いぶ^い小^い妓^いト^いホ^いト^い子^いと^いう^いれ^いが
親^い骨^いま^いた^いく^いの^いい^いも^い行^い来^いい^いろ^いく^い女^い子^い扇^いが^い出^いよ^い狂^い迂^い
ト^いあ^いら^いあ^いれ^いバ^い大^い妓^いの^いま^いら^いト^いヤ^いト^いこれ^いの^い松^い里^いさん^いが^いこ^いの^いり^い
作^いつ^いこ^いの^いご^いヨ^いと^いん^いら^いあ^いる^いこ^いの^いね^い里^いさん^いの^いお^い友^い達^い
ト^いト^い姉^いと^いう^いあ^いる^い心^いの内^い看^い官^いと^いう^い推^いし^いの^いへ^い

第三回

銀^いの^い目^い貫^いの^い太^い刀^いれ^い鞘^い橋^いを^い西^いへ^い流^いれ^い名^いを^いあ^いる^い金^いの^い郷^いの

春ぐに慾の世界の極樂園輕薄郎れ魂もこの里に宿
ぐへー有頂天人を欺く姫花の如くみ粧ふりまけく花
橋屋とふ青樓いびいどろさうーよは星燈籠一向宗の佛
壇よりもちごころり記産殖まき金ほど老るあが佛ト
うやうられまる通人の松里とつて粹の宵長お蔭を多し空
を貸ひく却問も兼てより結まうけさる亭主の狐右弟つ
ヲツナあつてまの凹入金くれんとぞをひくみ奥の茶室へ通
々ろこつて象山の天狗達翹をやさめる板柱うけ花籠よ朝

鳥の一輪喰へ投りも利休が流きをこくんである喜撰一握の
むらちふ咄嗟よるよあふ社看るやあいのさうあよりめ
よりやみの赤貝いり唇氣樓と金糸よぬいしそでる衣裳
の藝妓のお富士姉の鞠江とちもろともよ二階のまごトコトシ
あぐれびコレソく珍看亭の内馳走よ揚き姫さんの山へ来トハ
どうもつぬサア玄宗皇帝がむ納くのジヤト象と空がそぞく
おれび小富士の媳然トつ笑しわうくれるおれ継くらげお
分あつ金扇であううけちちふ嬌ぎらうもや空をちり月

小宮士
よんくあろしりぞや風をては月よあやまらんナマ
松里
ハテちそろい眼カじヤナト弥陀六のしるはるれあ
いひでも程がよいつのさんじヤイヤのちさふの舟慶で
いやそト船さうすれどこノ界がま 柝このおまをいふも
色藝ともよるびなに金盛まで多くの客をふり袖の
容易な帯をさされが人仇多くさる根のはくし
そのいもれがうとよるるうされどあまよは
まろくや色もあつ薄お梅はらよひきん人のるら

松里のそれとんくあろして
量ち一サモウ初學とよよへ出けよイヤく賢さかん
色よ易く イリヤント巻を
るダトむりふつ問へおころび極彩色の金屏風鴛鴦の
はぐいの翼をさるべらう息も雲雨の夢迷よんとけど
雪の膚よりさうり空燈物の下懸おあははむ換操
さくぬとらうさよやう梅ヤツイつあれ常の初孫の春の
ふらうまふが代のさるらわらうまの隣のら

枕子觸る金紋のおやカチん

第四回

ほろりとのやうなうらみで物たはせ網を張り伏猪
亭いつる阿漕の浦まぐなびきりしるゝお新もはる
雪の乾ドワヤ帰らふト帯しきち立あぐんしまるをわいも
のたをれ竹のくづき雪トウサリ枕子ゆびはれがふはまの
抱き付可い文句でありもまぐなびきりしるゝお新もはる
まゝのまはらふしるゝお新もはるしるゝお新もはる

チヨンボリあまゝ一層のまへさんと命も昇ゆくのりあし
雪の口舌子立腹もさつらうりしるゝお新もはるしるゝお新もはる
こゝろの火をあらうまて面白の雪まきでございませト
縁側の障子まるとあられがア、寒のく香爐峯のゆき
むうしるゝお新もはるしるゝお新もはるしるゝお新もはる
をおろのこやせお新もはるしるゝお新もはるしるゝお新もはる
香芥れをり子鴨の脛もはるしるゝお新もはるしるゝお新もはる
しるゝお新もはるしるゝお新もはるしるゝお新もはるしるゝお新もはる

二寸ばかりの覺悟の居候さりお入はあつてもはるは綱
へさうめが人も女房にしろれ小室まで埴梅あまの幸の世態の
味もまじりてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
モエエころの人もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
くぐん火焼の熱のいもあけを奪ひてむらさけ浦を
ちりんの巾細へさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
下より姉さんたの人でおくんなハ且那の今やまんで
居るさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

第五回

あつたは松里のやまをぬきかけさあさうさうさうさうさう
神さう拂あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
のやうなれど○かほりの法念願石の地蔵のむらさうさう
ほむさうさう有賊鐵鬼おまの性とい火水の処此らさう
あつたけがあまらうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

藤原子孫の如くさん一途方よれ此の業らうれ
煙管頰杖はほくねんとて花らうがねりいそいあ
氣やまけんよナニサ大夫失屈まするも子イゼ色男金と力い
るい物ダ敷苗うそそ承の上もイキナドヤ子エカクアゆりあ時
よ一杯のむとふふお富士さんその欄卓て象さんり
あげ子イカハ富士のイトいつも襟の中へさうりや 奥を
やしこまふおし涙でとありー火持の火を紙を折つては
あぶぎやうらうの尻をあぶつこそーおせがまーぬいグイと

のむ愁を掃 玉帯雪ふあつ湯のうんざけよ志ざくうさ
ばあぐさえけり

作者曰雪中の居續こころの對めちん鴨の
なぐやねいこれ人間の表被城されどあーみ
極をいあやそおりのさむこり象もゆがん
ざんりのさふやうしこの山をほみてはらりか
今いあーの吹くふ金のかまよの志をくれ女帯わい
愛でちらやあふみづらむもおこるべトかくひふ

作者も本うら落くる振るるるやうも鳴呼
が海もれを我官前車のくくくを我くくか

茅六回

去ほくふふふぬぬの身とありとてとてとてとて
山ぬきもせせせせせせせせせせせせせせせせせせせせ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
内町への向れぬやうく姑獲れ金山寺夜半の鐘とあり
づもくかよよ所いぬくくくくくくくくくくくくくくくく

尺の一寸楼ほこりあつたの本控子みどりの蒲志よきあつ
も六舟でねを三舟よききりその次のるれあひ客の唐の
あひまきわくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
老波女風流瘡のあひ女をなまつてくれ酒と肴もほつて
みだのむと花中より本字の南へとり出せ六老波女の交
わりもどくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
五つられられたる筆上の履のやうに組排べりて子持の
受くさい鰻り鮫の子イカハイ別のお着のモウごまかせぬ

医 ナニサベは... ぼんの... 俗人の... のドウモ
 るぬ イ驚いありませぬが電のさうでござらやま 医 イヤ
 その五回六回だの禁物ドヤ田ぶづも大壯をりこんで殆
 裸鯨も及んどそれよりとめく易物がよひ淮南がト湯
 豆府で小半合酒をのみほく ア頗ドロンケンヤ ここ
 あげて

子夏を顔さんるるぬ流をたの人で関子塞馬猿志
 その又次の其つ空の色も青田れ苔博おらぞのくりわ

自慢みや廣袖袴衣片をぬぎ口はほをまよまつ
 アノ髪ハナレノお経ダたらアハアヤアヤのこごヨエアノヤウ
 る塩辛なぐ酒の肴さるおと江戶子風のちきばいで
 河豚の湯をくいつ ア驚の味い又格別ぞ雪のあ
 豈一命を惜まんヤトハヨクわく句ごウイヤ河豚汁は
 あま命をすまんよりヨヤやき鯛をくふらがよ
 アレデモ縹帙の中は画をすりよる人の乳のもあま
 ぼくへくをトつがエナサアハ毛唐人の標言ダヨ日本の

奥の親玉と云朝のふとそれをすまへしあはれくつに肉の
喫をそごうておで女郎あひさるやうなものをいコンヤ
あつたらぬとてやうな物くそりやあつと又も例の
彦妻呼よやうラケくもめんのやうなトチキヤ節子とて
る娘があれがまゝ柱の花が咲くアイヤさうもいれぬ
菱や薦ねく人ぐきくゼトあれて居る処へ亭主雪仕
切をとりよくれとよひの仕切のこの通りだつ綱を
るふふまゝねらうらうらうイヤ袂抱がモウその毒氣は

たじくころて居るカライヤダヨヤ河豚のやうまつくせ
むらりの生酔むつ〜〜〜金の代りふ地をいおま下火折
をとりておくせが火をい四方へ飛ちりて何がわけをぬ
火の只つ面の沖とありあひの屏風はひたりたれが以前
の醫生新造子航程お〜ま〜ぬんふ波をう〜を鼻中
まなぐれ悪漢吹ひ〜腰をう〜て虎溪の三井を門
のふく者和膝のほとらりたれがみあ〜とも子碎〜たれ
一の字くはやまお〜た〜これいさ〜お〜お富ま〜りの

銅山の客人を欺する事と雖も身あがりの雲雀の聲は
うもいぢもいつら首尾のあくるをやらしく鞠江をうら
ひきて今宵の夜あけを来りしが小樓のむせせいのま
の灯已みけ破窓の紙ビラく風小閃あるよりさしこむ
月のあがりまをれいもあやむが待てて持たし鳥のつら
まの瘦るやうなまをみるもゆゑの昔ながらの
いづれ可憐さのゆゑのまをみんすつと持たし鳥のつら
おしも屋棟の上ふ鳥の聲カアイ〜

第七回

先次の業平よりもイ男ト古人の金言るべうら
されい三味線もど芝居もど藝もど持のやほおも
たべ〇解さくあれがいつなる美人もツイふけのをれよ
ある物あり爰小細山の大壘小富士を志なく只彼と
いづれもいづれも肌ふれざき終る千金を抛らう
根引よせんといひめ記たるが元来少室が親方の威
猛屋の長爪虎と俤号の付はどれ人抱きて銅臭を

あふふ子蟻の西風の皮は雨が如きれば子糸におほきあり
けりかきまをいそれとなくよりもほん子糸も世もあはれある
涙を流すつとむのくまの持病がおりしとく奥のつる
まを流りよれたるぐまそおしる輪江の葉よりよせそ
枕のそいへそつとあそく今糸さんか格子へあそぶ人ぞ
用ひのいカエトをれそうれしく首をあげ「モシ姉さん
これを流しそおんみアト小葉の紙に紅茶をそそ
がねあるその糸もやまらみまよそあそぶらうのそそ其夜

もあそぶらう車はこれ太鼓もやとお茶をむりそおほ子乃
叔も屏風子觸るねらそよふまをい起そ脊戸をあけ
飛石のついでにのそそ足もらのそそれほそ草胸へそそむ
芍薬の花壇を廻らせんまの葛蒲もらぬ糸のやみ
さざりくそ移をそそ維がよい中へ恒つがれけはまはる
うれそあのおほむらふの葉おほそおほくはらおほそれ
病もあそぶ朝鳥聲ほんよそ世も杖杖のそそそり戸
あそぶおほいおほそおほいそれとすいせんのもそれ恒のよ

たゞみくはつて飛ぶ姿は如もいのみまゝに續き
つれごとく花梅の心づくのそとまゝもやよげゆ
むよの本づけよりあつれゆる立人黒装束
面をつみやアタタ人をもつを引執へて轎へのせ
いづくともなく飛ゆ

第八回

人間萬事塞翁が馬くと首尾よく計りおのせ
その行さぬ夜本村の中はほゞまておの

表とくこみ庭のやりおはらうまふれおきつづこれ
それらもふ金魚のおよぐも奇癖も思はれど
わけ橋も風流めき住居あり内の換手をらへ
銅壺火鉢を拭き塵一匹も散られ鉄瓶も雨
おのほもいふ人たぎまる湯る体づゝお
は十三四の歳の女も獨兒一隻のその外
猫なく又節の頼もる一産に口れ二間の
子れはまら四季の草花のまきやせも圓山
風密山盡

ありふたきものをあつた鼻さび(ポット)をさるゝ書架に
獅子の口を吐くまうりるも床の文具を位置よく
あざりし側子琴一張を置くのコロシヤントころび
舞の帷と桐子う合きみおと小富士のあやうゆひ
し処で召れ肉子あありく具次くらく借人ト立
歩るころりふ桐山の客入るれがふさめまのりま
騒が其入扇を菊子とり「柘とんどれ狂言のおま
士さんが心底をさぐる為の針その作者の松里先生

此撥弁藻海にちやり款トあつり頭巾をとるきつれを
あつまづりいあをね山凡とくも禿坊至七賢人乃
あつまれやうる竹の林の敷醫師あり山をまするの始末
を記す魔林のさかんるころちくくしきくしき
おとそあれ出入りれ料理をハイ西者が出来あつてト
三ツ四ツさげく新がめるほのくんさくイ、塩をいト
みみくさるよ好むら家


~~~~~川原の~~~~  
~~~~~  
~~~~~

唐戎乃百五小管管海~~~~  
~~~~~  
~~~~~

安原の~~~~



